
無關心的遠距離戀愛

空無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無関心的遠距離恋愛

【著者】

Z7284D

【作者名】

空無

【あらすじ】

夕焼けの中、歩いた。茜色に誘われて、想うのはアイシのこと。

(前書き)

登場人物に疑問を持つても、お好きな設定で安心してお読みください。

外に出ると、まだ日は高かった。

朝の内は曇っていた空が、綺麗な茜色に染まっている。それは、恐ろしささえ感じるほど、壮麗なグラディションだった。燃えるような空の色に、夕焼けとはよくいったものだと感心する。思わず立ち止まってしまった僕を、後から外に出てきたひと達が訝しそうに見ていた。進路を邪魔していたからかもしれない。

それでもそのときの僕には、そんなことを気にしている心の余裕などなかつた。

その朱が、あのときの色を思い出せた。

「逢いたいな……」

ぱつりと零れた言葉。意識して呟いたわけではない。だから多分、それは僕の本音なのだ。

でも、僕からどういひするつもりはなかつた。

邪魔に、なりたくない。迷惑だと思われたくない。そんな、臆病な思いを拭うことができなくて。

もう一ヶ月も、声さえ聞いていないのに。

初めの頃は、こんなに離れるときがくるなんて思つてもみなかつた。いや、正確には、離れていてもこんなにも平氣で、けれどこんなにも辛いなんて、思わなかつたんだ。

「どうしてるかな、アイツ」

無条件にずっと傍にいられるものだと思つていたのはきっと、僕だけだ。ちゃんと考えたら、分かることなんだ。歳をとれば、生活が変わることくらい。

「……電話かメールくらいにしてこいつの」

見事な放置プレイだ。僕ばかりがやきもきしている。

『おはよう』とか、『おやすみ』とか、それだけでもいいのに。それすら、最近は送られてこない。最初の内は結構頻繁だったんだけれど。

忙しくなるんだとは告げられていたけれど、それがこんなにかかるなんて聞いてない。だから文句もあるけれど、ホントにまだ忙しいなら、そんなこと言っちゃ駄目だつて思う。

僕は、負担にだけはなりたくないんだ。

「……淋しいなあ」

四六時中傍にいたあの温もりを、僕はまだ忘れていない。その記憶があるから、今、ひとりでいられるんだから。その拠り処がないれば、僕はきっと耐えられない。

ちゃんとそれは、知つていてくれていると思つていたのに。

「淋しいよ……」

じわり、と目の奥が熱い。涙腺が緩んだんだ。けれど此処で泣くわけにはいかない。往来でなんて、しかもこの場所でなんて、泣いたら明日から近づくことさえできなくなる。

だから足早に、その場を離れた。駅への道を離れて、商店街の裏小道へ。

今の僕には、其処しか人通りのない場所なんて分からなかつた。

飲み屋の看板が小さく掲げられている小道。こんな時間に、この

辺りを歩いているひとはない。

僕はゆっくりと、深呼吸した。

「何で、連絡くれないのかな……」

一ヶ月は長い。あつとこいつ間に過ぎてしまつた氣もあるけれど、やつぱり長く感じる。出逢つてから、いや、傍にいるようになつてから、こんなに離れたことはない。

これが仕方のないことだと今は分かつてゐるつもりだけれど、でもやつぱり逢いたいと思う。

その度に、自分が未熟に思えて困るのだけれど。

「どうせ僕は学生だよ……時間ありますぞだよ……」

肩書きの違いが、こんなにも遠く感じる。

時期によつては命を削るような忙しさの仕事だから、だからこちから連絡なんてできない。していいかどうかさえ、僕には判断ができない。

だから待つていろの。

この一月、ケータイは何の反応も示さない。勿論、パソコンも。

「アイツのために、週末全部空けてるのになあ……」

何かアクションをすれば現状はどうあえず変わることは分かつてゐるのに、やつぱりマイナス方向に考えが走つてしまつて堂々巡り。いつもやつて、独りで愚痴るしかできない。前に悪友の前で愚痴つたら、とんでもないことを言われたから、言いたくない。

「ならその週末、どうして押しかけて来ない?」

「つ

誰よりも身体に染み込んでいろその声に、僕は思わず身体を振る

わせた。といふか、固まらせた。

今日は平日だ。少なくとも、休日だとは聞いていない。

「まつたく、独りで愚痴のくらいならメールくらい寄越せばいいだ
ら。オマエはホントに、自分からは動かないな」

「……なん、で」

まだ田が当たっている数少ないその場所に、疲れたような顔で立
つてゐる。ラフな格好じやない、スーツをきちんと着てゐる。

……休日じや、ない。

ならどうして此処にいるのか。僕の頭の中は今、疑問符で一杯だ
った。

「仕事でこっちに出張だつたんだ。思つたより早く打ち合せが終
わつたから、頼んで時間貰つた」

そんなことを、仕事を始めたばかりの新人がしていいのだろうか。
そういうことを知らない僕にだつて、心配になる。今は閑散期で
はないのだ。メールも来ないほど、繁忙を極めている筈なのに。
今だつて、目の下に隈が見える。

「文明の利器様々だな。なんとかぎりぎりで見つかつた。……おい
で」

そう言つて、手を差し伸べる。けれど僕は、其処から動けなかつ
た。思考が、現実に追いついていなかつた。その反面、何処か冷静
に現状を把握している自分もいる。

「……メールくらい寄越せ」

「一段落はしたからな、ちゃんと送るよつとする」

「嫌だつたんだからな」

「喧嘩はしていない筈だが?」

「それでも、嫌だつたんだ」

「そうか、悪かつた」

連絡が途切れたことが、いや、連絡をしてくれないことが、嫌だつた。手を振り払われたら、僕は自分の足で立つことをえできないんだから。手を差し伸べていてくれないと、僕は何もできない。それを知つてゐる筈なのに、それでも連絡ができないほど忙しかつた。でも、今、此処にいる。

それが、嬉しかつた。

それだけで、他はどうでもよくなつた。

「一ヶ月経つたのに、オマエからの音沙汰もなかつた。これでも焦つたんだ」

「……なんで?」

「浮氣でもされていたら困るなど」

悪友と同じことを言ひ。僕が気に入るだけあつて、ふたり共思考回路が似ていてたりするんだろうか。それとも、世間的にそう考えるのが普通なんだろうか。

僕には分からなかつた。

「なんで僕が、オマエ以外を選ぶの? オマエに振られたならともかくさ」

「振る予定はないが

「僕にだって浮氣する予定はないぞ」

そういう切つたら、何故か苦笑された。けれどなんとなく、僕とは違うところで悩んでいたのだとは分かつた。悩んでいなかつたら、

『浮氣』なんて言葉は出でこない筈だかい。

でもよく分からない。どうして僕が浮氣するんだろ。そもそも浮氣つて、何だろ。

「つと、もう時間だ

「そか

「帰つたらメールはするよ

「ん

「じゃあ、待つてひよっ。」

「分かつた

電車の時間でもあるのかもしれない。

ばたばたと駆けていく後姿を眺めながら、僕は気分がよかつた。

今日は気持ちよく眠れそうだ。最近、夜は眠れなくて、だから昼間眠くて仕方がなかつたから。

姿が見えなくなつてから、僕もよみやく商店街の表通りへ出る。ひとがそれなりにいて、閑散としていてもちやんと賑わつて見えた。

それを後目に、駅へと歩く。

鼻歌だつて歌えそうだった。

「お疲れ様」

直接は言ひ忘れていた言葉が、ここで言つても無駄なのに口をついて出た。周りに聞こえたかなと思つたけど、小さな声だったから大丈夫だつたみたいだ。聞こえてても別にいいけど。

今の僕は、機嫌がいい。

次の日悪友に話したら、何も解決していないんじゃないか、と言

われた。

……何か問題、あつたつけ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7284d/>

無関心的遠距離恋愛

2011年1月27日13時07分発行